

修験道の拠点である「吉野・大峯」、熊野信仰の中心地である「熊野三山」、真言密教の根本道場である「高野山」の三霊場と、それらをつなぐ「参詣道」から構成される。和歌山、奈良、三重の3県にまたがる。紀伊山地には、中国大陸から請来された真言密教の霊場をはじめ、日本古来の自然崇拜に根ざす神道と中国大陸・朝鮮半島から伝来した仏教・道教の融合で形成された日本固有の神仏習合の霊場や修験道の霊場、などが併存している。さらに、こうした霊場が参詣道によって結ばれることで、霊場と参詣道を含む山岳全体が、深遠な比類なき文化的景観となっている。人と祈りと自然が共生してきた、平和な民を象徴するこの景観は、人類のかけがえのない宝として、2004年7月世界遺産に登録された。

# 熊野古道中辺路・熊野本宮大社



1. 滝尻王子の石灯籠。苔むした姿は歴史を感じさせる。  
2. 坂本勲生さん。本宮で生まれ熊野古道と共に歩んで80年。  
3. 道中の「とがの木茶屋」付近。すぐ脇には、南方熊楠が保護運動を行ったことで有名な「野中一方杉」や「継桜王子」がある。  
4. 熊野本宮大社。檜皮の茶色が印象的な境内に一步足を進めると、空気が凛とする。  
5.6. 大斎原は社殿が遷座した現在でもスピリチュアルな空気が濃厚に流れている。入口に立つのは、高さ33.9m、横42mの日本一の大鳥居。



百間ぐら。険しい山道を登りきった途端、目に飛び込んでくるのは墨絵のような大パノラマ。語り部に連れられて初めてここを訪れる人は、この光景を目の当たりにして、暫し呆然とするそう。曇天時や夕暮れ時の霧がかかった幽玄とした眺めが有名だが、この日のような晴天時の眺望もまた素晴らしい。

ことだそうで、足元は谷に向かって深く落ち込み、目の前には熊野の山々がパノラマとなつて広がる。一度見たら忘れられない風景だ。

熊野三山のひとつ、熊野本宮大社。大斎原と呼ばれる熊野川の中洲にもともと社殿があったが、明治の大洪水で流失し、かろうじて残った上四殿が高台に遷座された。大注連縄のかかる門の奥に、檜皮葺きの社殿が荘厳な雰囲気です。長い旅路を終えた巡礼者は、この静謐な空気に圧倒されたに違いない。観光地化された豪華絢爛な寺社にはない、本物の祈りの景観がここにはある。

坂本さんは、講演会の講師として全国的に活躍しているが、いつも「使いながら保存することの大切さ」を話すのだという。熊野古道はすべての人々を受け入れてきた道。世界遺産になったからといって制限や規制を設けることはできない。だからこそ、使いながら後世に引き継いでいく必要があるのだ、と。実際、中辺路では、中学校の生徒や企業が参加する道普請が毎年行われている。また、卒業後地元に戻り、熊野の良さを伝えていくことという若い世代が育っている。坂本さんの想いは確実に受け継がれているのだ。

「道というのは、何かと何かをつなげるものではないか？ 熊野参詣道は京都と本宮大社をつなげるものでもあるけど、私らと地元の若い子らをつなげるものでもあるし、世界中で同じように文化的景観を残そうとする人々をつなぐものでもある、と思います。」

熊野参詣道(熊野古道)のひとつ、中辺路は、現在の田辺市・海岸部から山中に分け入り熊野三山を巡る道。かつて、中世の上皇たちが京都から熊野に詣るために利用したことに端を発する参詣道だ。道中には「王子」と呼ばれる熊野神の御子神を祀った祠や社が点在し、祈りの道と呼ばれる熊野古道の中でも、とりわけスピリチュアルな空気に満ちている。

中辺路の大部分は険しい山道。自然と人々の祈りが一体となった「文化的景観」を醸し出している。古道の一部は、現在でも生活道路として使用されている。

熊野古道で二十年間語り部を務めているのが坂本勲生さん。地元・本宮町で生まれ育ち、小中学校の教員として四十年間教鞭をとった。現在は熊野本宮語り部の会長として活動している。今年で八〇歳になるが、その健脚ぶりには舌を巻く。

「世界遺産になつてたくさんの方がここに来てくれますが、単に観光するんやなしに、歴史的な事や地域住民の想いを知ってもらいたくて語り部をしています。」

坂本さんは国土交通省が選定する「観光カリスマ」に選ばれるほど人気が高い。豊富な知識と分かりやすくチャーミングな語り口がその人気の秘密だ。

坂本さんと中辺路・小雲取越を歩いてみる。背中のリュックに付けた熊避けの鈴がチリンチリンと響く。時折立ち止まって道端の草木を説明しながらゆっくりと歩く坂本さん。谷側から涼風が吹き抜けてくる。「いい風が吹いてきましたな。こういう風を私らは『極楽の余り風』って呼ぶんです。」

熊野古道で最高級のビューポイントとなるのが「百間ぐら」。くらくらというのは断崖の